アサシンが参る！

雨の日の河童

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

不慮の事故で死んだ青年がアカメが斬る！の世界に転生した物語。

注意!!

作者が勝手にいじっている部分もあります。

目次

転生者が参る！ 1
夜の街に参る！ 4
手伝いに参る！ 7
夢に参る！ 11
探索に参る！ 16
夜に参る！ 上 22
夜に参る！ 下 25
運命が参る！ 上 28
運命が参る！ 中 31
運命が参る！ 下 36
何処かに参る！ 40
雪国に参る！ 43
近衛兵と参る！上 48
近衛兵と参る！下 52
三獣士が参る！ 56

転生者が参る！

それは一瞬の出来事だった。
学校の帰り道スマホをいじりながら信号待ちしていた時のこと。
ふと、目の前に影ができ何事かと思って前を見ようとした瞬間、凄まじい衝撃と共に身体が宙に浮いた。
空は、嫌になるくらい青く赤い液体が太陽の光を受け宝石の様に綺麗だと感じながら俺の意識は暗転した。
で、次に意識を戻ったら全裸って・・・何の冗談だよ。
しばらく周りをきょろきょろとしていると神様みたいな人が突然現れなんか色々と説明された。
何でも、手違いだとか。
神様の部下？みたいな人がミスしてしまったらしくそれで、お詫びとして転生させてくれるらしい。
俺は中二病が刺激され、アサシン系の能力を注文。
そうして、簡単に、呆気なく、あっさりと俺の転生は終わった。
で、今更なんだが・・・・・・俺の名前なんだっけ？

「ん・・・」
目を覚ますと見知らぬと街の路地裏にいた。
空には星が瞬いているため夜だと判断。おお、マジで生き返ったのかと少し感動。
そして、新たに貰った身体を確認すると。
装備品　仮面　おしまい。
Q．そんな装備で大丈夫か？
A．大丈夫なはずねぇだろう
あのポンコツ神ッ!!
全裸で転生とか聞いたことないわ!!俺はター○ネー○―か！
まずいな、このまま見つかればどうなるか子供でも理解できる。
服を手に入れなければ。
全裸で大通り出るのは流石に、恥ずかしいので近くにたまたま落ち

ていた黒い腰布を巻いた。・・・そこ不衛生とかいわない。
折角なので仮面も付けるか。
仮面は見た感じ死神（卍解しないほう）を彷彿させるデザインで結構気に入った。
仮面を装備し、路地裏から出る。
「ほおー、ホントに異世界なんだなぁ」
事故のせいか名前も自分が住んでいた町の景色も思い出せないが街中は一目で今まで暮らしていた世界と違うと感じた。
のんびりと異世界の街を観光気分で歩いていると噴水を発見。
そうだ、顔とか目の色とか変わっているかもしれないし見に行こう。
銀髪でオッドアイとかならいいな。
髪　黒髪　目　黒目　顔　普通？　姿　ハサン
・・・はさん？しかもこれって
「ザイード？」
皆さんは知っているだろうか？
ザイードとは『ＦＡＴＥ／ＺＥＲＯ』のアサシンの英霊「百貌のハサン」の一人。
複数の人格を持ち、その人格分だけ肉体を持っているハサン。その数は覚えていないが確か８０ぐらいだったような気がする。
その中でも、特筆すべき点もない人格が居る。そいつは聖杯戦争開始早々に囮としてマスターにも同じ仲間にも「我らの中で最弱だし、ま、いいや」ぐらいな感じで見捨てられている。そんな一番弱い人格のザイードになっている。
何が言いたいかと言うと詰んだ。正確にはチェックや王手の状態。
この世界がヒャッハー!!状態でなければ大丈夫だが。確かに一般人に比べればその運動能力、潜伏能力、罠や攻撃、そして、ダンスなど凄まじい超人なわけだが・・・・。
嫌な予感がする。
金もなく、服もない。おまけに最弱。
・・・なんだろう凄く疲れた。

憂鬱な気分のまま再び夜の異世界観光に戻る。
それで、たまたま曲がった壁に何か張り付けられているのに気が付いた。
ん？なんぞ、これ？なになに・・・指名手配　うっわー、物騒なフラグがたったよ。
へぇー、暗殺集団『ナイトレイド』ね。できれば関わりたくないな。
・・・・・・待て。ナイトレイド？
思わず二度見。さらに、詳しく読み直す。
「まさか・・・」
い、いや。流石に、そこまでポンコツじゃないだろあの神も。
間違えだと言い聞かせ道を曲がると・・・
血だらけの少年と日本刀を持った少女。そして、頭に変な機械を乗せて両手に剣を付けた男がいた。
「「・・・・・・」」
三人は驚いた顔をしてこちらを見る。
俺も驚いた顔で見ている。が、その三人に見覚えがあることに気づき、
「お、おじゃましました」
そのまま逃げるように俺はその場を離れる。
そして、自身の身体を駆使して屋根に上り全力疾走を開始。
や、やっぱりアカメが斬る！の世界じゃねぇかー!!!!
こうして、俺のはらはら（精神的）どきどき（物理的）の異世界生活が始まるのだった。

夜の街に参る！

夜の街を音もなく駆け抜ける。
はい、転生初日から「ナイトレイド」と遭遇したハサンです。
名前？やっぱり、事故のせいか思い出せないのでハサンの名前を借りることにした。
それにしても・・・
「この身体、滅茶苦茶使いやすい!!」
そう、最弱でもやはり暗殺者の英霊。
先程の場所から全力で走っているが全く疲れないし、ジャンプをすれば隣の屋根さえ軽々跳躍。遠坂邸で見せたあの見事な潜入シーンを思い出す（その後の事には触れてはいけない）
屋根から屋根へ飛び移り、
これなら、『気配遮断』のスキルも使えるようになるはず・・・!?
「ッ!!」
側面から嫌な気配を感じ取りその場から上に飛んだ。
その直後・・・
高速の弾丸が通り過ぎた。
丁度、自分の頭があった場所を正確に。
身体を独楽の様に回しそのまま屋根から落ちる。
あ、あっぶねぇー!!いま、死にかけたよね!?あれか、調子乗んなってことか？やっぱ、この世界やべぇ（；。Д。）
「ぐっ」
そのまま、地面に落ちるも受け身を取り何とか無事。
・・すんません、嘘つきました。受け身失敗して腰が痛いデス・・・。
って、そんな場合じゃない。
早く障害物に身を隠さなくては!!
丁度、窓が開いている場所を発見。そのまま全力で突入したのだった。

マインｓｉｄｅ

「ッチ。外した」
マインは少し息を吐き自身の帝具『浪漫砲台パンプキン』を静かに下ろす。
ボスであるナジェンダの命令で今、帝都を騒がしている殺人鬼『首切りザンク』を殺す為、高台の狙撃ポイントで待機していた。
今夜は、月が出て明るく絶好の機会だった。
だが、獲物は見つからず退屈していたその時、アレが現れた。
例えるなら、影人間。
月明かりで照らされているにも関わらず顔さえ見えなかった異形のナニカ。
自身の直感があれは危険だと判断したときには既に撃っていた。
必殺必中の一撃。
無意識ではあるが今までにないほどの完璧な狙撃に標的は為す術もなく撃ち抜かれる。
放った弾丸は速やかに獲物を殺す・・・はずだった。
「なッ?!!」
いきなり、真上に跳躍。
頭を抉り飛ばす銃弾ははるか彼方に消えていった。
ありえない。
側面からの狙撃を避けたこともそうだが、それよりも驚いたのがその跳躍力。
横に転がり避けるのも、一歩下がって避けるのも分かる。
銃である以上、弾道は必ず直線。
故に、理論上では避けれるだろう。
だが、上に避けるなど考えたこともない。
影人間はそのまま、銃弾を飛び越え、空中で回転しながら転がり落ちていった。
「おい、マイン。ザンクの奴でもいたか?」
「レオーネ・・・」
護衛として周りを警戒していた同僚が現れる。
先程の銃弾を聞いて来たのだろう

「・・・いや、何かよく分かんないのが居たんだけど逃がしちゃった」
「変なの?変なのってどんなのだよ?」
「実は、・・・・」
ザンク狩りを終え、アジトでナジェンダに謎の人間を見たと報告。
その姿をアカメとタツミも見たと聞き、報告会が少し長引くのだった。

手伝いに参る！

現在の時刻は、朝の六時。みんな段々と起き始めるころですね。
どうも、昨夜にヘッドショットを貰いかけたハサンです。
いやー、あの時は心臓が飛び出るかと思った。
確かに、この身はアサシンの英霊であるがこの世界にはでたらめな、それもへたしたら宝具に匹敵するものがゴロゴロ転がっているのだ。
調子に乗って『・・・他愛無し』とか言った瞬間、死にかねない。
さて、あの狙撃を上手くかわした後、どうなったか、だが・・・
「へぇー、変態の分際で私を無視すると・・・。随分と舐めてくれるわね」
金髪のお姉さんに正座させられています（泣）。
簡単に説明すると
ハサン「うお!?狙撃された!!逃げなきゃ」 以降、ハサン略して、
『ハ』と表示
窓、発見!!
ハ「ラッキー、窓が開いてる。ここでやり過ごそう」
金髪のお姉さん「・・・・・・・・」 以降、金髪と表示。
ハ「・・・・・・・・サンタクロースだよ？」
金髪「しねえええええ!!」二丁拳銃取りだし
ハ「やべッ!!」速攻で武器をはじき気絶させる
とまあこんな感じで実際は、もう少しまとも（まともだったと思いたい）だった。
・・・はい、俺が全面的に悪いね、今回。
だって、腰布と不気味な仮面だよ？
もう、夜にこんなのが入ってきたら誰だって・・・ねぇ？
で、気絶させた後に我に返り介抱して目覚めるまで待機。
そして、先程目が覚めた金髪に事情を説明しながら謝罪中。
・・・因みに、仮面は剥ぎ取られました。
よって、ただいま腰布一枚の状態。・・・腰布が長くて助かった。

「・・・それで?あんたはたまたまここに入ってきたと?」
「はい」
説明しながら頭は床に。
「・・・それじゃあ、帝国とは無関係なのね」
「はい」
真実なので全て肯定する。
すると、上から大きなため息が聞こえ
「わかった、顔をあげなさい」
と言われ顔をあげると
「ふんッ!」
「ぐおっ!!」
顔を蹴られた。
いや、実際には避けれた。避けれたのだがこれは、この蹴りは喰らう必要がある。
なぜなら・・・
「これで、裸見たことは帳消しにしてあげる。感謝しなさい」
というわけです。
前世の漫画で、殴られたり蹴られたりするだけで終わるラッキースケベとかずるいわ~・・・
なんて、思っていたがかなり痛いな。
「で、話は戻るけど・・・」
なんて、くだらないこと思っていたら金髪が話しかけてきた。
「私の銃、壊れたんですけど・・・」
「え?」
うそ!?はじいただけで壊れたの!や、やばい。今、手持ちないしというか腰布しかない。
「そ、それは、その、すいませんでした」
「・・・まぁ、いいわ。なら、私の仕事を少し手伝いなさい。無事、終わったらチャラよ」
というわけで仕事を手伝うことになりました。

大まかな説明で、何でも暗殺の仕事らしい。
・・・さすが、アカメの世界だ。ちょっと俺にはついていけない。
で、俺の役割は侵入経路と脱出経路の確保。
それ以外は何もしなくていいらしい。
まぁ、それぐらいなら・・・。
「そ、なら頼むわ。ところで、アンタの名前聞いてなかったわね」
こちらに仮面を投げ返し問いかける金髪。
俺は気合を入れる為、仮面を装着し、床に膝をつけ自己紹介をする。
決して、アサシンの英霊として恥じないように。
「俺の名は『ザイード』。群にして個の影が一人。影として貴方に仕え、守りぬきましょう」
「きもい」
ザイードの心に精神的ダメージ９９９９!!
・・・俺の心はボロボロだ!!
うむむ・・・。早速、やっちまった。アサシンの英霊の皆さん本当に申し訳ない。
「・・・でも、頼りにしてあげるわ、『ザイード』」
「ッ!?」
まさかの下げて上げるとは・・・恐るべし金髪!!ってそういえば
「それじゃあ、朝ごはん食べてくるから」
「少しお待ちください」
「なによ?」
少し不機嫌そうな顔でこちらを振り返る。
「よろしければ貴方のお名前をお聞かせ願いたい」
いつまでも金髪呼びでは失礼にあたる。
すると、納得したかのように頷き、
「私の名前は・・・・」
あれ、なんか嫌な予感・・・。
「ドーヤ。北の奴らから依頼を受けた殺し屋よ。私の名前を聞けたことを光栄に思いなさい」
凄いドヤ顔である。

ああ、そういえば『ザイード』って直感のスキルがあったんだっけ。
もう本当、笑うしかない（。∀。）アハハ八八ノ＼ノ＼ノ＼ノ
＼／＼／＼／＼・・・・・・・。
暗殺ってクロメの事かよー!!!!
早くも死亡フラグが建ちました。

夢に参る！

ふむ、どうしたものか・・・。
おはようございます。異世界に来て早々、死亡フラグが建ったハサンです。
やはり、名前が思い出せないのでこれからはザイードと名乗る事にしました。
雇い主のドーヤは街に出かけに行きました。そのため、部屋には俺一人。
で、現在、何に悩んでいるのかと言うと・・・・
「服、手に入れ損なった・・・」
はい、未だに腰布一丁ままなのです。
夜ならまだしも（夜でもアウト）日が完全に登りきっている状態で街に行けるはずがない。
・・・いや、仮に『気配遮断』が発動しても行きませんが・・・。
因みに、今は仮面を外している。これからは、仮面をつけた時は仕事モードに、外している時は素の状態に切り替えるようにした。
さて、ヒマで仕方がないので今後の事を考えよう。特に、クロメの事を。
だが、それにしても情報が少なすぎる。考え着くことはクロメの戦力ぐらいか。
頭をひねってもいい考えが思いつかない。
そうだ！目をつぶって瞑想しよう。
もしかしたら、何かひらめくかもしれないし。
善は急げとすぐさま瞑想の状態へ。
むむっ!!これならいい考えが思いつきそうだ。

ドーヤｓｉｄｅ
綺麗な金色を風になびかせ帝都の市場へと向かう。
大通りには人が溢れるほどいるが人々の顔は暗く、足取りもまるで力がない。

ドーヤはそんな彼らを蔑んだ。
力がないと嘆き、誰一人として自身は変わる努力もしない彼らに心底、腹がったってしょうがないのだ。
ドーヤは異民族だ。そのため、子供の頃に理不尽な暴力に怒りを感じた。
なぜ、こんなことをするのか！と問えば決まってこう返される。
『異民族だから』と。ドーヤには妹と弟がいた。両親は安い賃金で働きながらドーヤ達姉弟を守ってくれた。
『お父さんたちがいない間、二人を頼んだよ』
両親との約束。可愛い妹と弟を姉であるドーヤは二人を守るのに必死だった。
だが、運命は残酷だった。
たまたま、山菜を取りに行った時にそれは起こった。
家族が異民族と言うだけで知らない二人の男に無残に殺されていた。
家族だったものを見て目の前はグラグラと揺れた。優しい両親はもういない。可愛い妹弟も二度と目を覚まさない。頭の中はぐちゃぐちゃでいろんな感情が混ざりあっていた。
そんなドーヤを見ながらにやにやと嗤いながらドーヤを指してこういった。
ああ、さっきの生きる価値のないゴミの残りがいるぞ。
その瞬間、今までにないぐらいの怒りが襲う。父が護身用としてくれた拳銃を刹那の速さで抜き去り標的を撃ち抜く。
重い衝撃と同時に紅く見る絶えない花が地面に咲いた。
あっけない。
そう、あまりにも簡単にそいつらは死んだ。
今まで、異民族だからと蔑んでいた彼等も自分と同じ紅い血を流し、そして、今、死んだ。
その時、彼女は歪んだ答えにたどり着く。
「力がないから奪われる。なら、力を付ければいい」
こうして、幼い少女は簡単で残酷な真実を知った。

それからは力を手に入れる為、死ぬほど努力を重ねてきた。
今回の暗殺もその一環。帝具使いを殺すこと。
そうすれば、また一歩安心して暮らせる。そう考えながら・・・。
ドーヤは自身が気に入ったパン屋でパンを四つ買った。
いつもなら二つで十分なのだ。
だが、今回は違う。
昨夜、シャワーを浴び終え、着替えている最中に窓から飛び込んできた変態。
確か、名前は・・・ザイード。
長い腰布に、不気味な仮面。
その姿から、死神が来たのかと思い固まってしまったのだが最初に出た言葉が・・・
『さ、サンタクロースだよ?』
その時、一瞬で分かった。
あ、こいつ馬鹿だ。
その後、裸を見られたこともあり拳銃を構えたのだが目にも止まらぬ速さで弾かれ気絶した。
で、目を覚ますと仮面をつけた男が床に座り謝ってきたのには驚いた。
どうせ、あの格好では外には出れないだろうからわざわざ買ってあげたのだ。
「戻ったわよ。って、なにしてんのよ、アンタ・・・」
自身が取った部屋に入り、ザイードに声をかける。
何か変な恰好で地面に座っているザイード。
「ザイード?」
だが、声をかけるも反応はなく不思議に思い首に手を当てる。
「ッ」
脈がない。
「ザイード!!」
いきなりの事で頭が混乱する。
ドーヤはザイードの顔を叩いた。

ザイードｓｉｄｅ
ザイード!!
パンッ!!
ふぁ!?何事だ！てか、顔が痛い。
びっくりして目を開けると酷く動揺した顔のドーヤが。
「ど、どうした？」
「生き・・てる？」
勝手に殺されていた件について。というか、何時の間に寝ていたんだ俺は・・・。
「寝ていただけだよ」
「でも・・、脈止まって・・・」
ん？脈が止まって？
「そうなのか？まぁ、安心して欲しい。依頼を終えるまで絶対に死なないから」
「・・・・・・」
おおぅ・・・。無言は怖いんだけど。
「・・・ふん、別に心配なんてしてない。それよりこれ」
ん？
ドーヤからパンを貰う。
「それ、アンタの分だから」
・・・優しいところあるんだなぁ。
「ありがとう」
礼を言ってパンを食べる。うん、旨いな!!
「それ食べ終わったら、街に行くからはやくしなさい」
「え？」
「あんたの格好、目立ちすぎるのよ。だから、まともな服を買いに行くわ」
感謝しなさい。とドヤ顔でこちらを見てくる。
いや、でもこの格好じゃ・・・。
「上から布でも羽織れば大丈夫よ」
お金も・・・

「私が払うから。そうね、前金と思いなさい」
「・・・ありがとう」
お礼を言うと、ふふん！とした顔で得意げだ。
なら、善は急げで。俺は素早くパンを食べるのだった。

探索に参る！

はい、どうもこんばんは。街で服を買ってもらったザイードです。
現在の時刻は夜の十二時。いやー、楽しい時間はあっという間だった。
服を買ってもらい、昼食を食べ、買い物しながら帰る。
うん、言葉だけだと恋人同士の一日みたいだな。
・・・まぁ、買い物はドーヤの銃を直すのと俺の武器を見繕っていたので恋人同士の買い物と言うより、仕事仲間との資材調達みたいな感じだったが。
既に、ドーヤは寝ている。
で、なぜこんな夜更けに起きているかと言うと・・・・
「なんで、俺と同じ部屋何ですかねぇ・・・・」
何故か、同じ部屋に寝ることになったからデス。
いや、内心凄く嬉しいよ。
ドーヤが信用してくれてるみたいでね？
でも、こっちは見た目カッコいい（あくまで個人の感想です）暗殺者だけど精神年齢十七の高校生ですよ？
緊張して眠れるわけないだろう!!
「と言うわけで、夜の帝都に向いたいと思います」
俺の知っているアカメが斬るの世界では帝都は腐っている。
だが、それは漫画の世界。
実際は、腐っていないかもしれない。
俺は確認の為、夜の街に飛び込んでいった。一縷の希望をかけて・・・・。

今夜は雲が月の光を遮り、夜の闇を一層深くしている。
今回は屋根から屋根ではなく普通に歩くことにした。
今の状態は勿論、仕事モード。
腰布と髑髏の仮面を付け街の中を歩いて行く。

己の足音もなく、気配もない。完全に気配遮断を習得できたようだ。
やはり、ハサンの身体は最高だぜ!!
なんて、考えていると路地に嫌な気配を感じた。
確認の為、路地に入る。
そこには・・・
幼い少女とその子より少し年上の姉の様な女の子に刃物を突き付け下卑た笑いをしている五人ほどの男がいた。

「嬢ちゃん?いいか、ここでは俺たち帝都に住んでいる人間が偉いんだよ。わかる?お前みたいな異民族の餓鬼は俺達に奉仕しなくちゃならねぇわけ」
「ひっ」
ナイフを突きつけられ怯える年上の少女に歪んだ笑顔でリーダー格の男が語りかける。
「といっても俺達は其処まで鬼じゃないから安心しな。お前が丁寧に俺達を満足させてくれたならそっちの餓鬼は見逃してやるよ」
後ろに庇った幼い少女を彼女は一瞥し、少女は諦めた様に服を脱ごうとする。
ぷっちーん。
・・・・・はーい、理解した。漫画の世界とほぼ同じだな。
なら、遠慮はしないぞ?
「そうそう、聞き分けのいい子だ・・・ゲガッ!!?」
ハサンの身体能力を駆使し、壁を音もなく蹴り進め、男の上まで移動。
それから回転を入れながら男に踵落としを決める。
ベゴッッ!!!
肩に当たった踵落とし。嫌な音と感触が足に伝わる。
「いあぎゃ・・・・!!?」
思わず持っていたナイフを落とし、あまりの痛みに肩を押さえる屑。汚い声で叫ぶ前に喉に掌底を打ち込みそのまま壁にたたきつけ

る。
流れるように、棒立ちの二人目にハイキックをお見舞い。
これまた嫌な音が裏路地に鳴り響く。
「あ・・・ああ!?」
残る三人は尻もちをついて言葉にもならない声をだしながらこちらを見る。その目は先ほどの弱者を狩り喜ぶ目ではない。
「・・・・・・・」
幾ら怯えたところで、結果は変わらない。
そのまま、蟻をつぶすように一人ずつ胸板を踏みつける。
「た、たすけて・・・!!」　ベコッ!!
・・・他愛無し。
最後の一人を踏み潰す。嫌な音は聞こえたけど、ま、死んではいないだろう。
それに、これにこりたら変なことしないだろう。
それにしても・・・
はぁ。やっぱり、腐っていたか。
俺はこの世界に来て最大級のため息をついた。
この世界で分かった事。
漫画と同じ様に、この国は腐っていること。てことはこれよりひどいことも起こっていると・・・。
・・・漫画通りだとしたら俺の精神もつかなぁ。
色々と救いがない世界だし。どうしたもんか・・・。
「あの・・・」
後ろから声をかけられる。
やべ、すっかり忘れてた!ど、どうしたら・・・。
「あ、ありがとうございました」
少女の声は若干震えている。
そのおかげで平常心を取り戻した。
「いえ。お怪我がなくてなりよりです。しかし、こんな夜更けに幼子二人が外に出るのは感心しませんな。さ、お家に帰りなさい」
家に帰る様に諭す。

うむ、ハサン先生モードはいいな。こんなにもスラスラ言葉が出る。
「・・・・い」
「ん？」
「お家、無いの」
今まで、姉の後ろに隠れていた妹らしき少女の答え。
・・・なるほど。なら・・・
「あてはあるのか？」
「・・・いいえ」
「じゃあ、ついてくるか？」
「え？」
よし、決めた。
助けたのなら最後まで面倒見るべきだ。最悪、独り立ちできるまでは。
偽善者だって？
やらない善より、やる偽善ってな。
正論ばかりで自分を固めるより自分が正しいと感じた事をやった方が後で後悔しないもんだ。
「どうする？」
少女達に問いかける。
来るも来ないも二人の自由だ。
「・・・いいの？」
「ええ、貴方達が良いのなら」
幼い姉妹は、少し考えスッと手を伸ばしてきた。
その手を優しく握る。
「よろしくお願いします」「します」
「ええ、任されました」
こうして、暗殺者は幼い少女の手を引き自身の宿に帰っていった・・・・。

次の日

「ねぇ、ザイード。言い訳あるかしら？」
「ありません」
はい、おはようございます。ザイードですよ。ただいまの時刻は朝の六時。
いやー、今日も快晴で太陽が眩しいＺＥ!!
昨夜の姉妹は俺のベッドでぐっすり寝ていますよ？
ん？じゃあ、お前は起きていま何しているかって？それは・・・・
正座で石を抱いてます（泣）
ただいま、三枚目。やばい、痛くないけど足が痺れてきた。
「ねぇ、私の見間違いかしら？二人ほど子供がいるのだけど？」（ニッコリ）
「あ、あはは、見間違いじゃないですね。それはそうと何で俺は石を抱いてるんですか？」
「ん～？知りたい、ザイード？」
「は、はい。教えてください」この時、既に足が痺れている状態。
「それはねぇ・・・」
そういうとドーヤは石の上に座ってきた。勢いを付けて。
「!!?」声にならない悲鳴
「あんたが私の居候なのに勝手に人増やしたからよ!!」
「だ、だって、あのまま外にいたらまた危ない目にあうかもしれないし！」
「問答無用!!」
「あああああっ!!?」
結局、姉妹が起きるまで拷問ごっこは続いたのだった。
『私、ザイードは、これからドーヤ様の許可なく、人を増やしません』
はい、復唱！」
「わ、わたくし、ざ、ザーイドは・・ドーヤ様の許可なく、人を増やしません」
よろしい!!さあ、下で朝ごはんでも食べましょう。わーい（*゛▽゛*）
そういって、いつの間にか起きていた姉妹に優しく語り掛けるドー

ヤ。そのまま嬉しそうな姉妹を朝食に連れていった。
俺は行かなくていいのかって？
生憎、足が痺れて立てないんだよ。ま、俺の足が痺れる位であの二人を保護できたんだ。
安い安い。
「ザイード！」
「は、はい？」
朝食に行ったはずのドーヤが戻ってきた。な、何事？も、もしやまた拷問ごっこ!?
ひィ!!と内心、某おにぎり頭と同じ声を出しながらビクビクしていると。
「・・・まぁ、今回は褒めてあげる」
「え？」
何でかわからないが褒められた。
「褒めてあげるって言ってるの!!ただし、次からはちゃんと相談するように！」
それじゃ、といってまた下に降りていく。
「・・・どうゆうことだってばよ？」
頭に疑問符を付けたザイードを残して。

夜に参る！　上

ヒタヒタ。
夜の帝都に不気味な足音が響く。
ヒタヒタ。
音がする方向に目を向けるも其処には何もいない。ただ、足音が聞こえるのみ。
今日もどこかで姿なき足音が聞こえるのだった。

どうも、この頃帝都で怪談になっているザイードです。
なんだか、気配遮断は上手くいっているのに時々、足音が漏れているようで帝都の警備隊や一般市民の方々に怖がられているそうな。
さて、今回は何をしているかと言うと・・・・
「帝都の金をたんまり貯め込んでる悪徳商人の家に来ています」
もうね、調べれば調べるほど屑しかいないんです、ここ。
不正に税を取ったり、貧しい人々からわざわざ盗んだり。それで、金に困った人に安い金で重労働させたり、身売りさせたりして。もうなんか救いようがないわ・・・帝都。
そういうわけで、今、五右衛門やってます。
腰布に仮面、そして、日本伝統の泥棒が使うような風呂敷を持ってこの頃、侵入、金庫破り、逃走を繰り返している状況。
盗んだ金は貧困に喘いでいる人にプレゼント。
が、これじゃあ、イタチごっこになるので出来るだけ良い解決方法を探している。
「ッ!?・・・今日はここまでにしておくか」
ごっそりと金を奪い、この屋敷の主の元に向かう。
悪趣味な扉を発見。間違いなくこの部屋だ。
音もなく扉を開け中を覗くと考えた通りの事が目に入る。
女性にのしかかり、今まさに俺がこの世で一番見たくないことをしていた。

「・・・・・・」
冷酷な暗殺者へと思考を切り替える。
・・・・ああ、本当にこの国はスクエナイ。
悪徳商人ｓｉｄｅ
今夜もいつもの夜と同じ。
家族の為に女、子供は身を差し出し、男は馬車馬の様に働き地を這う。
血反吐を吐き、声なき声でこの世の不条理を嘆く家畜ども。
それを窓の外から見るのは何と気分のいいものだろうか。
全て私の思い通り。
ああ、愉快だ、愉悦だ。
今日も私の為に美味そうな肉体が用意される。
「・・・・・」
絶望に染まり、何もかも諦めたその顔が私を満たす。
そうだ！今日は薬を使って壊そう。
歪んだ思考が加速する。ああ、興奮する!!もう我慢が出来ない!!
考えられる非道、悪逆で興奮は最高潮に。
早速、薬を使おうとして、
「あれぇ？」
視界が百八十度回った。
「捕まえたぞ」
その目に映ったのは死神。
興奮は恐怖に変わり、身体から熱が消え去った。
「貴様には永劫の痛みと恐怖を与える。慈悲はない」
ゴリュッ!!
首の付け根から嫌な音が聞こえた瞬間、意識を失う。
次、目を覚ますときしゃべることも動くことも出来ないとは知らずに。

ザイードｓｉｄｅ
首の頸椎を無理矢理壊し、肉塊を地面に転がす。

「・・・・・」
冷酷な思考で、それを実行。
これも初めてじゃない。何度も何度も、何度もやった。
手に残る『奪う』感覚。
これだけは、何時まで経っても慣れないな。
虚ろな女性をシーツに纏わせ、金と共に屋敷を後にする。
いつもの宿に戻り、仮面を外す。
あー、どっと疲れた。
助けた女性を自身が寝るベッドに寝かせる。どうやらぐっすり眠っている様だ。
「おかえり」
「ただいま」
ドーヤがベッドから声をかけてくれた。
ドーヤの側には最初に助けた姉妹が幸せそうに眠っている。
床に座り込む。
「・・・苦しいならやめればいいじゃない」
おろ?ドーヤが心配してくれた。
「心配してくれるのか（笑）？」
少しからかうように返答。そうでもしないと肯定してしまいそうだから。
「ふん。別に」
そういって、ドーヤはまた眠りついた。
「・・・・・・」
嫌ならやめればいい、か・・・。
頭の中ではさっきの言葉が繰り返される。
正直、人なんて殺したくない。
でもさ、ドーヤ。
「苦しんでる人や絶望している人を見捨てる事の方がよっぽどできないよ、俺は」
三日月を眺め、ポツリとつぶやいた。

夜に参る！　下

どうもみなさん、現在の時刻は午後三時。
おやつの時間ですねぇ。
目の前では、助けた姉妹が嬉しそうな顔してアイスを食べてます。
姉の方はバニラで妹の方はチョコのアイスと定番な組み合わせ。
ドーヤはオレンジジュースを俺はあんぱんを食いながらゆったりしている。
何であんぱんかだって？そりゃお前、願掛けみたいなもんだよ。
昨夜助けた女性はどうしたのかって？
自分の家に帰しましたよ。ちゃんと怪しまれないようにもしましたし・・・・ドーヤが。
・・・・さて、このまま平和に毎日過ごせればよかったんだがそれも終わりの様だ。
クロメの居場所が判明した。
今朝、将軍ロクゴウが帝都を裏切り西へ兵を連れ逃走したと新聞に書かれていた。
既に、追跡部隊が派遣されたとも。
原作では、ロクゴウがクロメの人形になっている。
よって、考えられるのは二つ。
捕縛され帝都で処刑されるか、もしくは、その場で殺されたかのどちらかだ。
エスデスは現在、北にいる。
となれば、クロメの暗殺部隊が追跡部隊として派遣される可能性が高い。
仮に、違った場合でもロクゴウを助けることが出来るだろう。
出発は夜中の三時。
狙うは、帰還している最中がベスト。罠を仕掛け、混乱に乗じて暗殺。
次に、帝都の門がベター。この場合は奇襲。
最後にバッドなのが帝都の中。この場合、暗殺はほぼ失敗だろう。

仮にできても、帝都に住んでいる異民族のハーフが標的にされる可能性が出てくる。
其れだけは避けなくてはならない。
「ねぇ、ザイードさん。それおいしいの？」
「こら！まだアイス残ってるでしょ！」
モソモソ食っているあんぱんを見て興味が湧いたみたいだ。
「食べてみるか？」
うん！と元気な返事を返す妹に申し訳なそうな顔をする姉。
「ん～変な味。けど、好きだよこれ」
そりゃよかった。
はい、お姉ちゃん!!と姉にも分ける妹。それをわたわたしながらも受け取り食べる姉。
二人が食べ終えるのを見て二人の口元をふいてあげるドーヤ。
こんな光景がいつまでも、何処でも見れる未来のために。
・・・よし!!腹はくくった！
最悪、暗殺に失敗しても帝都とは逆に逃げて、そのあとこっそり帝都に戻れば大丈夫だろ。
さて、そうと決まれば仕掛ける罠考えなくちゃ!!

こんばんは。
姉妹をドーヤに任せ、夜の十時に罠を仕掛けているザイードです。
はい！それじゃあ、今回の罠をご紹介しましょう!!
はい、まずはこれ!!
定番中の定番、落とし穴!!続きまして、トラばさみ!!そして最後は、お手製の地雷です!!
え、地雷？と思ったそこのあなた！こちら作り方はとーっても簡単。
だって、手動ですし。
えー、まず火薬をいっぱいにしたものを地面に軽く埋めます。この

とき、導火線を油で浸した状態にして置き地面から出しておくことが大切です。周りにもいくつか同じものと気に隠れるようにおきます。
後は、火炎瓶を投げて爆発させるという考えです。
・・・・しかたないだろ、高校生だぞ?そんな罠とかパッと思いつかなかったんだよ。
やっぱダメかな?駄目だよな・・・。
まぁ、なんとかする。無理矢理爆破させるから。そこ、罠じゃないとか突っ込まないで。
もう作ったんだから。
ふー、出来た。さて、ドーヤを連れてきますか
帝都の中に入り気配遮断を使う。
そして、曲がり角で人とぶつかる。
そこには、帝都警備隊の服装の少女がいた。傍らには犬みたいな生き物（何故か二本立ち）もいる。
ん?警備隊の・・・・少女?
「すみま・・・お前は・・・」
ああ、これスロットなら今頃、ボーナス確定!!みたいなテロップが流れてるだろうな。
「怪しい恰好・・・。悪党か!!」
いやァァァああ!!?何で、ここで『セリュー・ユビキタス』がああああ!?
まだ、死亡フラグは立ててないぞ!?
って、そういえば・・・・。
『他愛なし』
言ってたな、俺。
俺の馬鹿野郎（ノ・ω・）ノオオオォォォォ―おお!!!
月明かり照らされながらザイードは人知れず絶叫するのであった。

運命が参る！　上

セリューｓｉｄｅ
（なんだこいつは・・・）
目の前の悪党を観察する。
すらりとした無駄のない筋肉。武道などたしなんでいるのは間違いない。
服装は、黒い腰布だけで裸足。
そして、自身の素顔を隠すための不気味な仮面。
しかし、そのことすら忘れてしまうほどの『異常』がある。
目の前に居る筈なのに気配が全くしないのだ。
まるで、人間ではないようでただ、ただ不気味。
（何であれコイツは確実に『悪党』!!）
「コロ、加速!!」
「Ｇｙａａａａ!!」
コロは身体を回転させながら標的に突撃する。

ザイードｓｉｄｅ
「Ｇｙａａａａ!!」
ぎゃあああぁぁぁ!!?
とんでもない速度で突っ込んでくる帝具を軽業師真っ青のアクロバティックで避け、距離を取る。
その瞬間、後ろでは地面が抉れる音と何かが壊れる音が響く。
と、とんでもねぇ奴に出くわしてしまった。もう、後ろを振り返りたくないね。
駄目?だよね・・・。
かるく後ろを確認。
冷汗が止まらない。もう、滝の様に流れている。
―ω・）ちら
「・・・・・」　無傷
でーすよねぇー（泣）

さて、ここで問題。
なんでわざわざアクロバティックな方法で避けたでしょうか？
正解は・・・・
逃げるんだよオオオォォォォ!!
「な!?」
ふぅあはははは!!
勝てるわけねぇだろうが!!あんな耐久値お化け!!
さて、アサシンの持ち味は何か？
それは圧倒的な素早さと気配遮断能力による一撃離脱にある。
そのため、アサシンは他のパラメーターが犠牲になりがちなわけだがその中でも耐久値が低いことが多い。
李文書？ああ、あれは例外だから。
「待て!!」
うお!?帝具に乗って追いかけてきやがったぞ！
しかも銃、乱射してるし。
このままじゃ、街にもダメージがいくな。しゃあない、外まで誘導するか。
すぐさま、反転。そこからトップスピードで突っ込みコロと呼ばれた生物帝具を踏みつけ。
「な!?」
驚愕するセリューを尻目に再び逃走。
「くっ!?コロ、追いかけて!!」
よし、乗ってくれた。
さて、森まで出ますか。
・・・なんか忘れてるな。
まあ、いいか。
それにしてもどうやって殺るか。
仕事モードに感覚を切り替える。
・・・・まず、第一にセリューを殺すかどうか決めるとしよう。
彼女はいうならば洗脳状態に近い。自身のトラウマを克服するため『正義』を妄信している。

故に、それさえ解ければ一般的な人間になるやしれん。
・・・・が、現時点では治す手段を持っていない。そのうえ、下手に手を抜けば帝具に殺される。
厄介なことに他の『山の翁』と違い宝具も使えぬ。
「む?ここは・・・?」
帝都から離れたのは良かったのだが見覚えがある場所に着いた。
「罠を仕掛けた場所・・・」
つまり、足元には地雷（自称）や落とし穴、トラばさみ、爆薬の入ったものなどがあるわけだ。

「やっと、観念したか、悪党!!」
「・・・・・・」
ふむ、上手く巻くことが出来そうだな。
「おい、そこの者何をしている!!」
・・・・おい?速くないか?
思わず仕事モードから通常モードに切り替わる。
「私は、帝都警備隊のセリュー・ユビキタスです。賊を殺す為手伝ってください!」
ああ、まずい。俺の直感がマッハで逃げろと騒いでる。
「・・・どうする?クロメ」
「もちろん、殺すよ。新しい人形の動作確認のために、ね」
後ろをゆっくりと振り向く。
そこには、ドーヤの暗殺対象であるクロメが居た。
ああ、全くこんな大切なこと忘れるとか・・・。
死ぬかも。
まだ、帝都の夜は終わらない。

運命が参る！　中

逃げ場はない。
だが、それは敵も同じ。
落ち着け、取り乱すな。
「ふぅー」
息を軽く吐き必要最低限の酸素を取り込む。
「コロッ!!」
「!!!」
!!
剛腕が容赦なく背中を襲おうとして躱される。が、予想していたかのように別角度から風を切り裂きながら鞭が襲い掛かった。
帝国暗殺部隊ｓｉｄｅ
正に必殺のタイミングだった。
クロメが操る「骸人形」となった元・将軍ロクゴウは鞭での攻撃と鋭い観察眼を持って確かに獲物を捕らえた。
「・・・・え？」
それすら、ヌルリと目の前の男は躱した。
それは同じ人間なのかと思うほど不気味な避け方であった。
生物帝具の拳を見ずに身体を軽くひねるだけで躱し、続く鞭での攻撃を生物帝具の拳を利用し後ろに弧を描くように回転して避ける。さらに、迫る二撃目の鞭は首を狙うも、後転で避け、距離を取る。生物帝具はそのまま裏拳を叩き込もうとするが逆に踏み台にされ大きく距離を取られてしまう。
口で説明は出来る。が、それを瞬き一つするだけで自身がミンチになるような場面で出来るわけがない。しかもだ、決して遅い攻撃でもないのにそれを軽々やるこの男にクロメさえも驚きを隠せない様だ。
月を背景に佇む不気味な男。
その身は月の光に照らされているのに関わらず影の様に黒くその身に付けた仮面は本物の死神を連想させるには十分すぎた。
そして、死神の手にはいつの間にか火炎瓶が握られており既に火がついていた。

「ッ！コロ、奥の手!!」
「ゴオオオオォォォォ!!!!!」
「おそい」
生物帝具が暴走すると同時に火炎瓶は死神の手から落ち、
激しい爆発音と炎に身を包まれ悲鳴をあげる事すら許されず目の前が暗くなった。
ザイードｓｉｄｅ
どうやら、地雷がきちんと機能した様だ。
暗殺部隊のほとんどは殺すことが出来た。
土煙と火薬の煙が酷く視界が悪い。だが、一息つける。
「あはは!!凄いよ、凄い!!貴方、私の人形に加えたくなったわ!!」
「ッ!?!!しまった!?」
視界が悪いにも関わらず安心した代償は死角からの斬撃だった。
クロメが抜いた帝具「八房」をドーヤに買って貰った黒塗りの短槍で何とか受けるが足場にしていた木から落ちてしまう。
「処刑!!」
な!?
さらに、予期せぬセリューからの追撃。
ガツンと鈍い音が脳に響き木々の合間を縫って飛んでいく。
くそ、そういえば本人もなかなか強かったの忘れてた。
「はぁ、はぁ、はぁ!!」
息が上手くできない。しかも、仕事モードが切れた。
身体を極限まで軽くするため息を犠牲にしたのが裏目に出たか！
「くっ!?」
だが、休んでいる暇など無いらしい。クロメお気に入りのナタラが間髪入れず襲ってくる。
それを短槍で何とか防ぐ。
「コおぉロぉオオォォォ!!」
「ＧＲＡＡＡＡＡＡＡ!!」
「クソが!!」
最悪だ。トラばさみに落とし穴、他にもいくつか爆薬を設置した場

所があるが使う余裕がない!!
　刹那でコロの眼を一突きにするが、治りが速すぎて、無駄な結果に終わる。
「ハサン、しゃがみなさい!!」
「ッ!!」
　聞きなれた声に従い地面とっさに伏せる。
　ＤＡＮ!!と銃声が聞こえコロの頭が半分吹っ飛ぶ。
「逃げるわよ!!」
「了解」
　声の主に従い戦線離脱を試みる。
　が、
「ニガサナイヨ?」
　地獄の亡者の様に足に鞭が絡みつき行動を阻害される。
「しつこい!」
　余りのしつこさに心の声が漏れたが仕方ないと思いたい。
　再び、槍を使う。
　念のためザイード固有スキル『刹那の一刺し』を使う。
　タンッ!!
　鞭を簡単に切り裂き、先に逃げ道を確保してくれたドーヤの後を追い、途中で担ぎ上げて逃げる事に成功した。
　ドーヤｓｉｄｅ
「遅い」
　いつまでも帰ってこないザイードを探す為、ドーヤは外に出た。
「おい、こっちにいたか!!」
「いや、やっぱり森に逃げた様だ」
　帝都の警備隊が騒がしく、身を隠し聞き耳を立てる。
　どうやら、帝具使いの隊員と謎の犯罪者が戦闘中らしくその加勢に行く様だ。
「まさか・・・」
　嫌な予感とは当たって欲しくないときに当たる。それは過去の記憶に焼き付くほどに。

ドーヤの直感が告げる。ザイードがへまやった。っと。
仕方ないとため息を吐きながら、全速力でドーヤは森を駆ける。
ザイードを切り捨てて。
襲撃ポイントには自分一人で向かう。
元々、ザイードとの契約はクロメの暗殺を前提としたもの。
故に、足手まといになった場合は捨てると最初から決めていた。
・・・・決めていたというのに。
（どうしてこんなにも胸が痛いのよ・・・!!）
あのふざけた態度が、あの笑い声が、少し寂しそうな目が頭について離れない。
たった、数週間パートナーとして行動しただけだったのに情が移ってしまった様だ。
それをどうにかこうにかふりきろうとして、腹から震えるような爆音が辺りに轟く。
爆発した方角を確認し、知らずに口角が上がったのに彼女は気付かない。
「は、あのバカ私の獲物に手ぇだしてんじゃないわよ!!」
爆発したという事はそこで誰かが戦っていることだ。さらに、あの大規模な爆発。
ザイードが張った罠とやらに間違いない。
そして、それを使うことが出来る人間はザイードただ一人。
素早く、だが、誰にも自身を悟られぬよう森の中を進む。
そして、予想通り、帝具使いとクロメを相手にしながら苦戦する馬鹿の姿が。
「ハサン、しゃがみなさい!!」
「ッ!!」
特注で買った一発限りの使い捨てハンドガン、『コンテンダー２９』を撃ちこむ。
一発しか撃てない上に直ぐに砲身が熱で熱くなると言う欠点満載の銃だがその分威力は絶大だ。凄まじい反動が腕にかかるがそれに見合った火力が撃ちだされ筋肉が浮かび上がった気持ちの悪い犬も

どきの頭を半分吹き飛ばした。
（チャンス！）
「逃げるわよ!!」
「了解」
そのまま後ろを振り返ることなく先ほどの道を駆け抜ける。
少し遅れてザイード追いついた。
「わるい、かつぐぞ」
いつもより、声がおかしいが気にせずそのまま担がれた。
自身で走るよりも速く。そのまま大回りで帝都に入りいつもの宿に戻る。
「さて、ザイード？言い訳はあるかしら？」
「・・・・・」
「ザイード？」
ザイードに説教しようとして異変に気付く。
ぐらりとザイードの身体が床に沈んでいく。
「ザイード!?」
慌てて受け止める。
腹部からはドクドクと血が流れだていた。
幸い、腰布が血を吸っていたのか血の痕跡で場所を特定される心配は無くなっていた。
「ちょ、ちょっと怪我してるじゃない!!」
怒鳴るも意識がない様だ。
「ああ、もう！」
こうして、ドーヤの長い夜が続くのであった。

運命が参る！　下

はい、こんばんは。
油断して最後の最後に銃弾を腹部に貰ったハサンことザイードです。
さて、今俺は何処にいるでしょうか！
正解は・・・・
「越後製菓!!」
「ノリノリっすね、神様」
はい、この物騒な世界に転生させた神様の部屋でした。
「で、まさかとは思うんですが・・・・俺、また死にました？」
可能性としてはそれが一番高いだろう。
「あ、いや違う。実はな・・・・」
あれ違うの？じゃあなんで？
何だか少し申し訳なさそうにしながら説明し始める神様。
かくかくしかじかと、話を要約するとまたもや神様の部下がミスったらしい。
元々は、『アカメが斬る！』以外の場所に転生させるつもりだったらしい。
転生先の候補？あ、やっぱり気になるよな。
ＳＩＲＥＮだって。
「本当に、本当に今回ミスってくれてありがとうッ!!」
さて、そんなことより嬉しいお知らせがある。
なんと、宝具を使えるようになったらしい。
ただ、どんなものかは不明。
「まぁ、今回のやり取りは目が覚めたら忘れて貰うから。それじゃ頑張って」
え、ちょっとまっ！

姉妹Ｓｉｄｅ
今日も目を覚まさない。
ドーヤさんもお姉ちゃんも、もちろん私も心配している。
前みたいにザイードさんがふざけてそれをドーヤさんが怒る。
それをお姉ちゃんと一緒に慌てたり笑ったり。
そんな騒がしくて楽しい日々が恋しい。
「早く起きないかなぁ」
「・・・大丈夫。きっと今日にも目を覚ますわ」
思わず出た言葉にお姉ちゃんは優しく私を抱きしめた。
「どう、あのバカは起きた？」
ガチャリとドーヤさんがドアから入ってくる。
「・・・いえ、まだです」
「・・・そう。なら、少し早いけど朝ごはんにしましょうか」
そういって、みんなで朝食を取るため一階に降りていった。

ザイードｓｉｄｅ
「ん」
まだ少しばかり冷たい風に頬を撫でられ目を覚ます。
腹には包帯と何かの軟膏が塗られている様だ。
・・・何だか、重要な夢を見ていたような気がしたんだが。
「ザイードさん？」
っと、驚いた眼をしてこちらを見る姉妹の姉。
「おはよう」
取りあえず朝の挨拶を。
「ッ!?ドーヤさん!!」
その瞬間、脱兎の如く一階へと駆けだした。
な、なんでさ。
「あ、やっと起きたんだザイードさん!!」
そして、入れ替わるように妹の方が部屋に来た。
「ん？やっと？」

「うん。三日間ぐらい眠りっぱなしだったよ？」
お寝坊さんだなぁ。っと笑っている妹。
俺はと言うと絶句していた。
せいぜい一日程度かと思っていたらまさかの三日間。そりゃ驚きもするか。
「だから、ドーヤさんが仕事も失敗するし私に迷惑かけるバカはお仕置きだって」
「ゑ？」
「頑張ってね、ザイードさん！終わったら遊びに行こうね!!」
トタタタッと階段を駆け下りていった。
「ひ、避難だぁ!!」
ベッドから転がり落ちるように出て隠れる場所を探す。今回だけはシャレにならんわ!!
「あ、あれは！」
クローゼット！安地、ｋｔｋｒ!!
素早く動きたいのだが腹の傷が痛みいつもの数十倍は遅い。
「ザイード!!」
「ッ???!」
先程の音とは対照的にドタタタッと激しっく階段を上る音が聞こえる。
だが、クローゼットはすぐ目の前。俺の勝ちだ、ドーヤ！
ぱたりとクローゼットのドアを閉めた瞬間、今、扉壊したよね？っと疑いたくなるほどの轟音が響く。
ギシギシと床が音を立てる。
ドクンドクンと心臓の音が嫌に大きく聞こえる。
「・・・ねぇ、知ってた？」
ドーヤの声が聞こえる。だ、大丈夫。問題ないはずだ。
「私っていつもクローゼットは開けておくのよね」
あ。
ガチャリとクローゼットの扉が開かれた。
わぁ、ドーヤが今までにないくらい綺麗な顔で笑ってる。

「なにを、して、いるのかしら?」
凄く優しい声なのに何故だろう、冷汗が止まらないや。
「・・・・かくれんぼ?」
「ザイード、正座」
「え、いやでも、傷がまだ・・・」
「正座」
「・・・はい」
ああ、やっぱり今回も駄目だったよ。

何処かに参る！

突然だが、みんなは夕日が好きだろうか？
青から茜色に染まった空を見て、通学路を進みながら、ああ、今日も一日頑張った。晩御飯は何にしよう。
なんて考えるこの瞬間が、俺は好きだった。
それは、異世界に転生しても変わらない。
下宿先の窓から夕日が差し込み、雇い主様の綺麗な金色を照らす。
さらさらと風に吹かれて揺れる髪。無駄のない綺麗なスタイルに見惚れそうな美貌。
いつもは自信に満ちたその顔はほんのりとほほを朱に染め、少し色っぽい。
その満ち足りた表情は面倒な仕事が片付いた時の様に穏やかだ。
もう、絵にしたら間違いなく売れるね。まぁ、俺を椅子にしていなければだが。
・・・・ええ、ザイードさんはドーヤが嬉しそうで何よりですよ？
でもさ、俺、一応重傷だからさ？
だから、もうそろそろ、そのおも「は？」・・・・羽毛のように軽い身体を俺の背からどけてくれませんかね？
「あわわわ」
「がんばって～、ザイードさん」

はい、ってなわけでこんにちは。いや、もう夕方だからこんばんはか。
絶賛、人間椅子にされているハサンことザイードです。
いやー、今回の説教は長い。
それだけ心配かけたという事だろう。
ドーヤはツンデレだからね！
「次は、私じゃなくて石がいいみたいね？」
「申し訳ありませんでしたッ!!」
石は無理だから！この状態で流石に石は無理だから!!

必死の懇願が伝わったのかドーヤはそのまま降りてくれた。
た、助かった。
「さて、お仕置きはこれくらいにして」
「ん、帝都から脱出しましょうか」
はい、おふざけモードはこれくらいにして本題に入るとしよう。
今回のクロメ暗殺の失敗に加え、帝都警備隊との派手な大立ち回り。
これだけ帝都で騒ぎを起こしてしまっては暗殺する意味がない。暗殺とは平和な時にやるから効果があるのだ。
常に人が死ぬ戦場で司令官が殺されるのと絶対安全な砦で司令官が殺された時、果たしてどちらがより周りの人間に恐怖と不安に陥れることが出来るか？
勿論、後者だ。
絶対安全な場所がいつ死んでもおかしくない場所に変わった時の恐怖は筆舌に尽くしがたいものだろう。
賢い奴は真っ先に裏切り者を炙りだそうとするだろうがそれは悪手だ。
常に気を張り続ける事は必ずストレスが蓄積され心身ともに駄目にする。
上手く止めれば上出来だが、出来なければどうなるか？
答えは簡単。『自滅』あるのみ。
現在の帝都はそんな状態とは程遠いため、落ち着くまで全員で帝都から離れようというわけだ。
もちろん、残ってもいいのだが『もしも』が無いとは言い切れない。
なら、不安の種は摘み取るのが一番。てなわけで、
「ほれ、ザイードさんの胸に飛び込んできな」
手を広げ二人を待つ。
ドーヤの処置が良かったのか腹部はかすかに痛む程度でなんら行動に問題ない。
姉はゆっくりと此方を労わる様に側に寄り、妹は無邪気に胸に飛び込んでくる。

「おっと、元気がいいな妹。姉も遠慮せずに抱き着いていいぞ」
「えっと、お邪魔します」
妹と同じ様に抱き着いた姉。
俺はそのままゆっくりと二人をお姫様抱っこした。
さて、後はドーヤだが・・・・。
「背中借りるわよ」
乱暴な言葉のわりに優しく背に乗ってきた。
やっぱり、何だかんだでドーヤは人に気遣いが出来る良い奴だ。
「それじゃ、行きますか」

そして、部屋には最初から誰もいなかったかのように四人の姿が消えたのだった。

雪国に参る！

皆さん、冬は好きだろうか？
そう、ミカンとこたつが大活躍のあの冬ですとも。
雪が降った日にはテンションが上がる。
あと、有名なセリフで『恋人がいる時の雪って特別な気分に浸れて僕は好きです』ってあるよね？
実は、俺、自身は冬も雪も大好きなのだが俺の身体は好きではないらしく現在。
「あ、あばばば」
「ザイードさん、大丈夫ですか？」
「大丈夫？」
「情けないわね・・・」
絶賛マナーモードの様に震えているのです。
いや、このザイードの身体は元々暑い国出身なわけでして暑さや砂嵐は平気なんですが豪雪地帯というよりもはや氷と雪の国じゃね？って、場所はもうね。
戦力外ですわ。
はい、おはようございます。
帝都で失敗して帝都から無事離脱したザイードとドーヤさん一行です。
といってもまだ帝都近郊、油断も出来ないのが現状だが、なんでもドーヤに当てがあるそうなのでそこに向っている。
「それにしても・・・」
酷いありさまだ。
幾つかの村を通ったのだが必ずと言っていいほど死人が居た。
しかもそのどれもが餓死。
帝国の無茶な税のせいである。
あの人間の屑には出来る限り早く地獄に落ちて貰いたいものだ。
「よっと」
「・・・またやるの、アンタ」

やりますとも。それがザイード、俺という人間のとってやりたいことでもあるのだから。
みんな～ザイードのお料理教室はっじまっるよ～。
今回の材料はこちら！
コウガマグロ・じゃがいも・玉ねぎ・砂糖・塩・醤油でございます！
では簡単に調理をしますと食べやすい大きさに切って沸騰した水に全部ぶち込む。
そんで砂糖・塩・醤油で味を調えたら出来上がり！
まぁ、細かいことは省いたもののそれなりのものができるはず。
味を整えグツグツ煮込んでいると食欲をそそる匂いが辺りに広がり始めた。
最後の味見をする。
うむ、我ながら適当に作ったのに意外とうまいではないか。
などと自画自賛している間に人が集まり始める。
まぁ、村の中央でやってれば人が集まるのも当然だ。
というか人を集めることが目的なので問題なし。
「あの・・・」
鼻歌交じりで鍋をかき回していると子供を連れた女性が話しかけてきた。
「はい、どうぞ」
「え？い、いいんです・・・か？」
そんな女性にスープを渡すと驚かれた。
いいもなにもそのために作ったのだ。
「ええ、どうぞ。おかわりもありますよ？」
「ありがとうございます！」
「お、俺にもくれ！」
「わたしにも！」
それを見ていた他の人もスープ貰おうと我先にと溢れる。
「はい、それじゃあ一列に並んでください」
とまぁ一時間ぐらい相手してようやく人の波が収まった。

さて、もうそろそろのはずだが・・・。
「ザイード」
「お帰り、ドーヤ。獲物はどーや？」
「・・・寒いです、ザイードさん」
「一点かな？」
「死ね」
辛辣である。
特に最後のドーヤ。
「って、でっけぇクマだな」
しかも二体も。
何故？と思うかもしれないがこれにはちゃんとしたわけがある。
俺が料理している間、ドーヤと姉妹は暇になるので狩りを覚えて貰っているのだ。
「ほら、ザイードさん！私も狩ったよ！」
「おお！よく頑張ったな！」
妹の手には小さな野ウサギが。
姉の手には鳥がいた。
偉い偉いと妹の方を撫でる。
「姉の方も偉いなぁ～」
「あ、ありがとうございます」
勿論、姉も撫でる。
「このクマは置いて行くんでしょ？」
「ん～。少し欲しいけど荷車に入らないかもしれないしなぁ」
結局、少し頂いていくことにした。
さて、ここで疑問。
何故、雪道で荷車を引けるのか。そもそも何で持っているのか？
それは俺が暗殺王だから！
・・・・・・・・・はい。ただ宝具使っているのとステータスで筋力がＢ＋だったからです。
調子のってすいませんでした。
えー、まずステータスのことについて。

ただの勘です。
何となくこうだろうなぁって感じです。
因みにステータスは筋力Ｂ＋耐久Ｃ敏捷Ａ魔力Ｄ幸運Ｅとなっています。
う～む、取り柄がない。あ、気配遮断はＡでした。
で、肝心の宝具の能力。
それは幻覚を見せる事。その名も『妄想幻影』です！
これで帝都の関所を軽々突破したわけですよ。
しかもこれランクはＤと低いのですが対人の癖にレンジが長いので滅茶苦茶便利です。
さて、村を出て三日ほどで目的の場所についた。
ん？速すぎる？まぁ英霊の基礎体力舐めちゃいかんてことですね。
元々、雪国生まれのドーヤと姉妹は荷台で休憩を取りながらだが俺は休んでいない。
正確には休みたくなかった。
身体を一度休めるとその分冷えて動けるまでに時間が掛かるのだ。
故に、休む時は村でしか休まない。
で、着いたわけだが。
ドーヤが門にいる衛兵に顔を見せると直ぐに通してくれた。
すげぇ顔パスとか初めて見た。
そのまま荷車をドーヤの指示通り押しながらも街の様子を見て驚く。
帝国では見られなかった笑顔がここにはあった。
これには純粋に驚いた。アカメの世界で見れるとは思わなかったので尚更驚いた。
驚きながらも目的の場所に着く。大きな屋敷だ。
どうやらこの土地の領主とコネがあるみたいだ。
そして、そのまま門を潜り屋敷の中に入る。
「ドーヤ！久しぶりですね!!」
「そうね。二年ぶりかしら？」
そして、金髪碧眼の女性が出迎えてくれた。

しかもドーヤに劣らない美女である。
ドーヤがクールビューティーならこちらは天真爛漫と言える。
礼儀正しい口調に元気のある声はこちらの気分も明るくしてくれそうだ。
それに見た感じ武芸者でもあるようだ。
だが・・・あれ？なんかこの顔見たことある様な？
それに胸がざわつく。
はっ！まさかこれが恋!?
・・・だったら、よかったなぁ。
「初めまして。そしてよくいらっしゃいました。私はチョウリ大臣の娘、スピアと申します。よろしくお願いします！」
あ～～～、心がぴょんぴょん（三獣士と戦うことが決定して心臓がバクバクしているため）するんじゃ～・・・・・・。
また帝具使いとかよぉぉぉぉぉぉぉ!!
そんな感情をおくびにも出さず笑顔で握手するザイードであった。

近衛兵と参る！上

「オラァ！」
　こんにちは。
　今日も元気なザイードです。
「ぜりゃ！」
　ようやくここの寒さにも慣れてきたところで今では普通に暮らしています。
「クソ！槍兵は奴を囲め！逃げ場を無くして動きを制限するんだ！」
　雪の足場だというのに迅速な行動で指示通り動く近衛兵達。
　俺を中心に円形で囲み槍の穂先でこちらの動きを牽制。
　その間に両手剣の隊長格と共に二人の兵士が互いの動きを阻害せぬよう此方に向って突撃してくる。
「甘い」
「な!?あたっ!!」
「え、あいてッ！」
「痛ってぇ!?」
　だが、甘い。
　水気を絞り適度に硬くなった小さな雪玉をそれぞれの額に命中させる。
「よっと」
　悶絶している突撃兵を無視し、そのまま身体のばねを使い槍衾を作っていた兵士を一人一人倒していく。
　近距離では仲間に当たる為、振り回すことも出来ず槍兵達は為す術もなく地面に沈み。
「はい、今日の練習は終わり！解散！」
　俺の掛け声とともに今日の練習が終わったのだった。
　まぁ、見て分かる様にチョウリ大臣の近衛兵達と毎日模擬戦をしているザイードです。
　こんなことになったのはこの町に来て直ぐの事。
　スピアと握手をした後少しばかし休憩をしてチョウリ大臣と食事

をしたのだがその時の受け答が不味かった。
「君もドーヤさんと同じ傭兵なのだろう？」
「え。まぁ、そうですね？」
「いや、丁度いい。実は私の部下たちを鍛えて欲しいのだ」
「え」
　滞在させてもらうのに何もしないのは心苦しいので引き受けた。どうせ三獣士と戦うのだから兵士全体にそれとなく対策を覚えて貰おうと思っていたのだが・・・まぁ、これが凄い堅物たちで困った奴らだった。
「断る！」
「はぁ!?」
　もうそれはきっぱり断ってくれましたよ。
　近衛兵の隊長ジンという奴が言うには。
「お前の様な暗殺者もどきに教えを乞うまでもない。我々は十分強く、錬度も高い。貴様の様に影からコソコソと隙を狙う臆病者に教わるべきことなど一つもない。分かったら失せるがいい、誇りなき者よ」
「・・・・・・ほぉ？（#^ ω^）」
　いや、ね？確かに強いのだろう。どの兵の顔付きを見ても過酷な鍛錬と修羅場を潜ってきたのだろう。元の平凡な俺なら正論にぐうの音も出ないだろう。
　だが、この身体は紛れもない英雄のもので技術も超一流。
　それにこいつはあろうことか『誇りがない』など抜かしやがった。
　それに俺も元のザイードも怒りが溢れてしまい。
「・・・ばか・・・な」
「他愛もない」
　近衛兵を全員ぼこぼこにしたのだ。因みに仮面無しでやったので気絶しているものの誰も殺してはいない。
　んで、地域の住民からそれを聞いたスピアとドーヤが慌てて飛んできた。
「ザイード？」

「反省はしているが後悔はしていない！さぁ、やるならやるがよい！」
ドーヤを前にして雪の上で大の字になる。
まぁ、今回のことに関してはまったく後悔していない。
他者を知りもせず決めつけた奴らの自業自得だ。
自信と傲慢は全く別の物なのだ。
「はぁ。まあ今回はあんたが正しいわ。ただ、私達はあくまでチョウリ大臣の好意で滞在を許して貰っているのだからもう少し手心を加えなさい」
「・・・善処する」
「よろしい」
で、それからスピアとチョウリ大臣に謝りに行くと「お強いのですね！」と目を輝かせたスピア。大臣は「まぁ良い薬になっただろう」と満足げであった。
その後、食事の最中にスピアとチョウリ大臣に何処で何をしていたのか。流派は何か。などの質問攻めにはぐらかしつつ答ながらドーヤと姉妹に救援要請を送るもワクワクとしながら聞く姉妹と優雅にワインを煽りながら目線で続きを促すドーヤ。
正に四面楚歌。
馬鹿正直に『転生してきました！』なんて答えるわけもいかず適当な設定を作り上げたのだった。
内容は傭兵として育てられたが育てていた組織が壊滅。
そのまま各地で転々と仕事をしながら帝都にやってきた。
流派はあるにはあるが名前は知らない。
ドーヤとは帝都であることが理由で手伝いをしていること。
出身は自分もよく分からない。
はい。嘘です。
設定に無理がありそうだがごり押ししました。
で、ここからが本題。
まぁ、さっきも言ったが食事の席でワインなどのアルコール成分の入った飲み物があったのだが全員酒癖が悪いの何の。
もう、此処で語ると大変なのでまたいつか語るとしよう。

んで、話は戻るのだがあまりにもボロボロにされた近衛兵達はこうして模擬戦を挑んでくるようになった。
まぁ、色々あったが結果オーライ。順調に相手の戦闘スタイルを考えることを覚えてきている。
後は俺が三獣士の戦闘スタイルを真似たりすれば完璧だ。
「さぁて、夜は何をしようか」
曇り空に白い息を吐き出し俺は借りた部屋に戻ったのだった。

近衛兵と参る！下

やぁ、みんな自室に戻って三獣士の対策と宝具の練習をしていたザイードだよ。
みんなは苦手な食べ物とかある？
俺は納豆とかオクラとかネバネバした食べ物が苦手だなぁ。
因みにドーヤは豆が苦手で姉と妹はピーマンが苦手なようだ。
まぁ、頑張れば食べることができるから姉や妹、ドーヤの前では何食わぬ顔して食べて「好き嫌いは良くない」、なんてお母さんみたいなことやっているのだけども。
「ザイード殿、如何された？もしや体調が優れないのですか？」
「あっ、はい。オカマイナク」
これは（鼻を痛いぐらいに刺激する赤黒過ぎる麻婆）流石に無理だわ。
え、ナニコレ？本当に麻婆豆腐？合成失敗した悪魔の間違いじゃない？
今にも「オレ外道マーボ今後トモヨロシク」っていいそうなんだけど!?
「ささ、私の自信作ですのでどうぞ」
そういって外道麻婆を笑顔で進めてくるのはチョウリ大臣の近衛兵隊長ジン。
顔を見る限り心の底からの善意である。
この状況になったのはかれこれ一時間前にさかのぼる
「ザイード殿」
力強い声と共にコンコンと自室をノックされる。
「どうぞ」
「失礼する」
短く刈り上げた銀髪の男が部屋に入ってきた。
まぁ、声を聞いた段階で誰かは分かっていた。近衛兵隊長ジンだ。
いつもの様な寒冷地用の戦闘服ではなく私服なので午前中の再戦ではないだろう。

「どうしました？」
が、わざわざ俺の部屋に来た意図が分からない。それに俺の直感が危険と判断している。少し警戒するべきか。
「うむ。突然だが辛い物は大丈夫だろうか？」
「は？あ、ああ。まぁ大丈夫だが・・・」
警戒解除。
なんだ、飯の話か。どうやら俺の直感はこれに反応したらしい。
って、飯で危険って毒でも盛られるのか？
いや、それなら食べる直前で働くか。
ジンは「そうか。邪魔をした」といってそのまま帰っていき俺の直感も鈍ったかな？などと思っていたのだが・・・・・・。
うん、俺の直感。疑ってすまなかった。
しかもこの麻婆皆さん普通の顔で食べているんですよね。
ドーヤとか「あ、またこれか」みたいな感じで食べ馴れているし。
妹に至っては先ほどおかわりしに行ったぐらいだ。
「・・・ザイードさん？これホントに・・・」
「姉よ、疑ってはいけない。これは麻婆豆腐だ。いいね？」
ただ一人、姉だけは俺とおんなじだったようで顔に冷汗掻きながら此方を見ている。
俺はいつも通り涼しい顔で姉を諭しスプーンを持ち余裕の態度を見せる。
「・・・手、震えてますよ？」
「・・・・・・・武者震いだから」
・・・・・・・・・・・・・・・。
ドーヤ！ドーヤさん！ドーヤ様！助けて!!
これやっぱ厳しいよ！最悪、俺はいいからせめて姉のだけでも別のものに！
「ん？」
あ、気が付いた！流石ドーヤ！
さぁ、此処にいる助けを求める二人を救っておくれ!!
って、何でおもむろにスプーンを持ち上げているんですか？

あれ？なんでそのスプーンを姉の口まで持って行っているんですか？
「はい、あーん」
「!?」
あ、姉えええ！
涙目で此方を見る姉。
アイコンタクト
（ザ、ザイードさん！）
（・・・・・死にはしないから）
（ザイードさぁぁん!?）
裏切りのザイードは静かに合掌した。
アイコンタクト終了
「あーん」
「あ、あーん」
そして、外道麻婆は姉の口の中に。
「〜〜〜〜〜〜!!!?」
当然、涙目の姉。やはり辛かった。
不謹慎だが涙目可愛いな。などとほっこり（最低）したのが良くなかった。
「ざ、ザイードさん」
「ん？」
「はい、あーん！」
「!?」
因果応報。
自業自得。
裏切り者には報復があるのは世の常でありまして・・・。
「え、ちょ、落ち着け？」
「あーん!!」
涙目の癖に笑顔な姉がザイードの口に赤黒い凶器を近づける。
アイコンタクト
（待ってくれ！悪かった、次は助けるから！）

（・・・死にはしませんから）
（あ、姉ええええ！）
アイコンタクト終了
「・・・あ、あーん」
結論。
辛いけど案外うまかった。
それと姉との距離が縮まった気がする。

三獣士が参る！

帝都近郊
はらはらと雪舞い落ちる雪原地帯。
普通の人間ならば耐寒装備でなければとてもじゃないが動くこともままならない極寒の地。
そこに黒で統一された三人の獣が歩いていた。
「なぁ、リヴァまだ着かねぇのか？」
背に斧を担ぐ大柄の男。名をダイダラという。
帝具は二挺大斧ベルヴァーク。
並み外れた膂力を持つ人間にしか扱えない分凄まじい攻撃力を持つ。
ダイダラを例えるならば力の獣。自身が最強となるため闘争を求める。
「焦るな、ダイダラ。獲物が逃げているわけじゃないんだ」
落ち着きを感じる男。名をリヴァという。
帝具はブラックマリン。
指輪の形をした帝具であり水棲危険種が水を操作する器官を素材としており装着者は触れた事のある液体なら自在に操れる。
リヴァを例えるなら知の獣。
知勇兼備の彼は主の命の為あらゆる知識を発揮する。
「でもリヴァ。仕事は早く片づけた方が後々楽じゃない？少しペースあげよ？」
愛らしい顔をした青年。名をニャウという。
帝具はスクリーム。
聞いた者の感情を自在に操作する笛の帝具。
戦場の士気高揚として知られているが操れる感情は数十種類に及ぶ。
ニャウを例えるなら技の獣。
狂気的な趣味を持つ彼は他者を傷つけ壊す術を持つ。
彼等、エスデス直属の部下。三獣士である。

彼等は主であるエスデスの命により暗殺任務を任されていた。
それは邪魔な文官の殺害である。
かつてオネスト大臣と互角に争った政敵であるチョウリ元大臣を殺すのだ。
だが・・・・・・。
（・・・おかしい。なぜこれだけ歩いても目的の村まで到達しない？景色は確かに変わっている。そして、我らの速度も落ちていない。地図の不備？いや、確かにいい加減な仕事をする者がいたかもしれないが距離だけは正確なはず）
リヴァは違和感を覚えていた。
どれだけ進めども全く着かぬ目的地。
まるで蜃気楼の様だと。
「！」
そう、蜃気楼だ。
此処は砂漠ではないがその例えがしっくりきた。
「ダイダラ、ニャウ。構え・・・！」
「な!?」
「はぁ!?」
何もない空間から突如、無数の刃物が飛んでくる。
突然の事態に思わず驚くがそこは三獣士。
迫りくる刃物を弾き、躱し、叩き落す。
「くそっ！いったい何処から!?」
「固まれ！敵を視認するまで死角を作るな!!」
「ああもう！何なんだよ、一体！」
互いに背を庇い三角形を作る。
四方に気配を感じるが姿は見えず。また景色も変わらず。
ただ、地面に落ちた黒いダークだけが落ちているのみ。
「・・・・・・・・・」
極限の集中。
それはアスリートでいうゾーンと同じ。
僅かな動き、音ですら見逃さない。・・・はずだった。

「シャ!!」
「「!?」」
突然の殺気。
それは信頼できる同僚に任せた背中から現れた。
三角形の中心に敵はいたのだ。
(いったいどうやって近づいた!?)
自身に迫る投擲物。
それは白い布を巻かれた幾つもの鋭い針。大小さまざまな針を回避する。
「貴様・・・!」
「・・・帝国。三獣士、その命貰い受ける」
それは死神だった。
身体を隠す黒い布。
相対しているはずなのに気を抜けば消えそうな気配。
そして、感情を隠す不気味な髑髏の面。
「晩鐘は貴様らを指し示した」
ぞくり。
心臓を掴まれたかのような感覚。
だが、折れない。折れるわけがない。
既に一度、死んだリヴァに死の宣告は通じない。
「やるぞ!ニャウ、ダイダラ!!」
「はっ!経験値にしてやる!」
「気持ち悪いんだよ、お前!」
三人の獣に囲まれた死神がポツリと告げる。
「妄想幻影。やれ、ドーヤ」
甲高い銃声が雪原に血ノ花を咲かせる。
「あ」
「「ニャウ!?」」

ガクリと膝から崩れ落ちるは三獣士の技の獣。
ニャウはまるで信じられないという顔をしている。
「ダイダラ!!」
「オウ!!」
死神の相手をダイダラに任せリヴァはニャウの血液を操る。
「は、あはは・・・。ごめんね、リヴァ」
「喋るな、ニャウ」
銃弾は腹部を貫通。
手早く応急処置を済ませ、二発目の銃声が響く。
「ッチ!まだかリヴァ!!」
「あと少しだ!」
「戦闘中に余裕だな」
「く!」
死神は巧みな槍捌きでダイダラを追い詰めていく。
「貴様は何故戦う?」
「はっ!そんなもん俺が最強になるためだ!!」
ズンッ!!と腹に響くほどの力で死神を叩き潰す。
死んだとダイダラは確信する。肉が潰れる手ごたえを感じたからだ。
だが。
「虚ろな武の道に何を見た?弱者しか倒せぬ最強か?」
「クッソがァァァ!!!!」
死神は何事も無く後ろに立っていた。
「下がれ、ダイダラ!水塊弾!」
リヴァは念のために持っていた水と周りの雪解け水を使い死神を牽制する。
「貴様は何故戦う?」
「お前にいう事はない!!」
右に左、地面を這うような回避方法はもはや人の動きに見えない。
「腐った牙で何を噛み千切った?貧困に喘ぐ人々か?」
「戯言を!!」

そんな二人を援護するためニャウはスクリームを手に持とうとし。
「僕の腕がぁぁぁ!!!」
「ニャウ！水龍天征！」
未だ姿を見せぬ狙撃者に肘から下を吹き飛ばされた。
「貴様には問う価値すらない」
死神はそのままダイダラとリヴァの攻撃を避け続ける。
水龍が死神に殺到し、そのわずかな隙間をベルヴァークの投擲による回転する斧で塞ぐ。
「先見えぬ暗闇に逝くがいい」
「ダイダラァァァァァ!!」
だが、それでも死神は死なない。
（今ニャウを失うわけにはいかない！）
リヴァの指示にダイダラは迅速に行動する。
撤退だ。
エスデス様から叱責、いや殺されるかもしれないがこの死神の情報だけは届けなければならない。
帝具はすでに回収した。
後は殿を務めながら逃げ延びる！
だがそれを許すほど彼等は甘くなかった。
「かかれ!!」
「くそ！またかよ!!」
また何もない空間から突如敵が現れる。
金髪の槍を持つ女。それに従うのは帝国の鎧をまとう兵士達。
（この用意の良さ！まさか罠だったとは!!）
「邪魔だ、雑魚ども！」
ダイダラはベルヴァーク振り下ろす。
「刹那の一刺し」
「ごはっ」
「なん・・・だと!?」
ことは出来なかった。
あの死神がいた。

だが、自身の前にも死神がいる。
（二人目！一体こいつは何者だ!!）
死神の槍はダイダラの巨体を吹き飛ばした。
「がふ」
そして、四度目。
心臓にその一撃は導かれる様に入る。
口から大量の血を吐き予言通りニャウは四度目の銃声によりその生に幕を閉じた。
「舐めた真似を!!」
「あら、何事も勝てばいいのよ。そんなことも知らないの？」
「てめぇ・・・」
そして、重症のダイダラに現れたのは銃を持った無駄に自信にあふれた女だった。
「じゃあ、死になさい。貴方を殺して私はもっと強くなるから」
「」
それは屈辱であった。
今までこそこそと隠れていた臆病者に経験値として殺される。
それがダイダラに最後の火をつけた。
「オラァ!!」
火事場の馬鹿力。
その一撃はダイダラの人生において最高の一撃。
ベルヴァークも敵を殺せという使い手に答えるが如く唸る様に空気を切り裂く。
だが、生涯最高の一撃は女には届かなかった。
「ア？」
ダイダラは自身の目の前がブツリと暗くなる。
そして、何が起こったのかもわからずそのまま冥府へと誘われたのだった。

神速。そうとしか言えない速度で拳銃を抜き、肘に二発、眉間に一発入れた女。
ベルヴァークの斜めからの斬撃は肘を撃たれたことにより腕が耐え切れず千切れた。
よって、女を切り飛ばすことなく見当違いの場所に飛んでいったのだ。
「・・・全滅か」
舐めていたわけではなかった。
だが、心のどこかで慢心があったのだろう。
リヴァは自身にドーピングを施し、剣を握る。
「・・・・・・・・・・」
「悪いがドーピングさせてもらった。もう少し付き合え死神」
「・・・・・・・・・・」
その顔に表情はない。
だが、応じる様に槍を構える。
「いくぞっ！」
「いや、終わりだ」
ザクリ。と背後を斬り飛ばす。
「ぐ!?」
「やはりな。貴様の帝具は認識を弄る物だな？」
死神が膝を付く。
死神の攻撃はいつも死角、もしくは意識の範囲外からの攻撃だった。
なら、此奴は最後に必ず背後から斬り掛かる。
「さらばだ」
そのまま距離を詰め両断。
仮面は真っ二つに割れ剣は股下まで斬り裂いた。
「な・・・に？」
「終わりだと言っただろう？」
背中からの衝撃。見れば自身の胸から心臓から槍が生えていた。
黒塗りの槍。

それはたった今斬り裂いた男の獲物だった。
「血刀殺！」
リヴァは本能に任せての奥の手を使う。
だが、死神は既にいない。それどころか周りには誰もいなかった。
ただ、ただ、暗い世界がリヴァの最後の景色だった。

三獣士。
飢狼のように力を求め、ネコのように残虐で、龍のように襲った。
そして、この雪の大地で獣の様に狩られたのだった。